大津百町瓦版

夏　季　号［No．２６］
２０１５年　　７月
発行　大津の町家を考える会
大津市中央１丁目８－１３
TEL・FAX　077-527-3636

大 津 ・ 町 家 ・ まちなか ・ いろいろ情報

湧き出る大谷の走井

京から大津へ向かう逢坂越えの途上に、ひっそりと佇む寺がある。瑞米山月心寺と名付けられたこの寺は、日本画家橋本関雪の別邸としてあったものを夫妻の死後に、その菩提を弔う臨済宗の単立寺院として天龍寺派の僧 村上独譚により開山されたものである。寺の境内には山の傾斜を美しく利用し造られた走井庭園と呼ばれる旧い石庭が遺されており、その中腹に在る井筒からは今もなお枕草子に記された名泉「走井」の水が静かに流れ落ち、瀧となり池を満たしている。平安の昔、街道を往来する人々の乾きをを癒やしたであろう山の水は、数々の歌に詠まれてその名を遺した。

江戸に入ってからは、走井茶屋として東海道の賑わいに浴し益々とその名を上げた。歌川広重の浮世絵「東海道五十三次」の大津に描かれた走井の井筒はこの頃の物であり、元井戸から直接に水を引き入れて茶屋の軒先に据えたとされる。小野小町の百歳堂や、松尾芭蕉の「大津絵の筆のはじめは何仏」の歌碑が設けられたのもその頃なのだろう。

その後、汽車が走り始めると東海道の往来は次第に閑なものとなり、大津絵などで知られる大谷の界隈もかつての賑わいがまるで夢であったかのように寂れていくこととなる。

橋本関雪がこの地を訪れたのはその頃の事で、ちょうど銀閣寺の畔に新邸を造営している最中の事だった。当初は資金的な事もあり入手を諦めたものの、その後に建物や石庭などが解体されるとの話を聞き無理をして買い取ったという。特に関雪を動かしたのは如在殿と呼ばれる明治天皇が二度御小休をなされた場所が取り壊しの憂き目に遭いかけたからだという。この画家の持つ皇室への崇敬の念と、旧きものに対する理解と協力が走井を遺したのである。雄大な歴史の流れとともに、走井の水もまた流れ続けていくのだろう。

［瑞米山 月心寺　橋本 眞次］

「故郷・街並み・町家、そして地元大津」っていったい何？

大津長等に生まれ育ち、長く故郷を離れていた。盆・正月にはもどっていたが、街は通り過ぎるばかりだった。この数年、年老いた両親が病気がちとなり、もどる回数も増え、昨年は看護のため家族は大津へ引越した。

40 年程前大学で建築を学んでいた私は、卒業研究で駅前の大津八町あたりを調査し、街づくりの活性化の論文・設計をまとめたことがあった。当時は、大津の中心市街地はまだ活気があり、商店街も賑わっていたが、大津八町あたりは、駅に近いにもかかわらず衰退ぎみで何らかの手を打つべきだと考えたからだ。

40 年前の通りの風景

その地域は路地も多く老朽化した質素な平屋の住宅が多かった。しかし、寺町や各通りには「町家造り」の街並みの中で駅へ行きかう人々や通りで遊ぶ子供達など下町特有の庶民的な風情が漂っていた。そして 40 年後の今、この地域は大きく様変わりした。駅のすぐ隣地には超高層マンションが建ち、建替えられた建物もあるが、昔の街並がなくなり空地や駐車場が目立ち、人通りの少ない「見知らぬ街」に変わってしまった。

現在の通りの風景

「故郷・街並み・町家」っていったい何だろうか？私が長年暮らす沖縄は激しかった沖縄戦で多くの尊い命と形あるすべてのものを失った。そのため、今、首里城はじめ琉球王朝時代の文化遺産の復元が進み、街では何かにつけ沖縄らしさが求められている。第二次世界大戦で爆撃を受け廃墟となったヨーロッパの各都市も戦後復興はかつての街や建物の「復元」から始まったと聞く。それらは、先人のつくった歴史や文化を子孫に伝承し、地元のアイデンティティを大切にする所以である。そして、このようにつくられた都市はどこも歴史と個性を感じさせ、住民が誇る魅力ある街となり、多くの人々が集う活気ある街となっている。

沖縄らしい新しい商店

大津の姉妹都市、ドイツ・ヴェルツヴルク

戦後、日本は古い街や建物が残っていたにもかかわらず、それらを生かすことなく経済性や機能性優先の街づくりがなされた。大津は京都・大阪に近く、山と湖にはさまれ細長いという特殊な地理条件のため県庁所在地でありながら開発から取り残された。そして、新しい都市ビジョンもないまま時間が過ぎ、中心市街地の空洞化が進むと同時に、琵琶湖湖畔や郊外の緑地や農地が宅地化され、都市のスプロールが進み、大津特有の山と湖の美しい自然景観や環境が損なわれつつある。

私がかつて調べた大津八町は、きわめて高密度な木造町家群の中で通りや路地を介してしっかりした住民のコミュニティが存在していた。老朽化しひどく狭隘な建物は、現代生活に不都合であり、若者にとっては不人気であったが、この地域の活性化で最重要なことは地域のコミュニティをいかに維持し持続させるかであると思っていた。

大津中心市街地の再生と活性化が叫ばれて久しい。

駅前大通り・大津百町を横断する都市計画道路・浜大津の活性化ビル･駅前の区画整理などの事業もあった。

40 年前の寺町商店街

しかし、それらは地元住民のコミュニティや住民の実生活に役立つものだっただろうか。そもそも、その空洞化の中で残された大津百町の街並や町家は、大津の地理や気候風土の中で先人達が長年かかってつくりあげてきた大津のアイデンティティや郷土愛を形にしたものである。私は、その中にこそ、今後の大津をどうするかという大切なヒントがあると考える。そして一番大切なのは地元住民のコミュニティの存続である。つまり、町家や街並の保存活用を考え、老人・若者・子供が快適に暮らせる街づくりこそ重要である。大津百町のあるところは大津の中心地であり、すでに都市インフラが整備されている。必要なのは時代にあった住民のための住宅や街の再整備である。外観は町家であっても内部をモダンに改装したり、時には街並にあわせた建替え、そしてささやかな商業活動の場やコミュニティ維持のための公的空間を補正するなど地に足のついた新しい試みをすべきと考える。そのためには大津百町の建物、街並そして住民の意向などをくわしく調べ、なぜ空洞化したのか、今後どうするべきなのかを今一度、故郷を思う心で考えるべきだ。目先の経済性や機能性そして、来訪者に期待したこれまでの活性化でなく、地元住民が住み続けられ、大津から出た若者が帰りたくなるような誇りと魅力のある大津の DNA を受け継いだ街づくりこそが、今、求められている。　　【 会 員　福村　俊治 】

甦る芸能神　関蝉丸芸能祭に集う１５００人

去る５月３１日（日）に、逢坂にあります関蝉丸神社下社にて「第一回関蝉丸芸能祭」が開催されました。ぎりぎりまで心配された天候も、気持ちの良い風が吹く新緑美しい空間に恵まれました。当日は、滋賀県知事、大津市長をはじめ多くの来賓の皆様もかけつけて下さり、関係者を含め１，５００人近い人々が芸能祭に参加され、境内は一日中賑わいを見せていました。

金剛流宇高通成師（能楽）、山本雅楽邦師（箏曲）をはじめ多くの素晴らしい出演者にも恵まれ、開催時間９時間という長丁場ではありましたが、観客も途切れることなく一日中楽しんで観覧頂けた事は、実行委員会側と致しましても大変喜ばしい事でありました。これもひとえに、開催にあたりまして氏子の皆様方、近隣周辺の皆様方、地元企業様のご支援の賜物と感謝致しております。

「芸能の祖神は大津にあり」

この１，２００年前より逢坂の関へ静かに鎮座する関蝉丸神社下社。京都と大津を往来する人々を見守り、文化を愛する蝉丸。その歴史や由来を研究するにつれ、益々その重要性に気が付き、何とかして芸能の祖神を甦らせ、ひいては地域の活性化に繋がらせたいと考えて参りました。今後も引き続きこの思いを大切にして参ります。

地元の皆様をはじめ多くの方々のお力添えを頂戴いたしまして深く感謝申し上げます。今後とも引き続きご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

関蝉丸神社芸能祭実行委員会
会 長　川　戸　　良　幸

「暮らしのひろば」をめざす石山商店街が、いま、おもしろい！

大津百町館のある「ナカマチ商店街」。西友の撤退というショッキングな動きがある一方で、(株)百町物語が取り組む新たな店舗の誘致や開設などが話題を呼んでいる。

こうした「ナカマチ商店街」に負けず劣らずがんばっているのが、ＪＲ石山駅から延びる石山商店街である。商店街のメンバーが中心になって、活性化への取り組みを進めている。この商店街は、ＪＲ石山駅周辺での大きな工場の立地とともに発展してきた企業城下町の商店街である。そんなこともあって、ナカマチに比較すると商店街の歴史は浅く、そのぶん歴史や慣習にとらわれることも少ないようだ。新しいことにチャレンジしていく気風が漂っている。そんなふうに感じられる。

すごい人出で賑う石山商店街の夜市

あふれるパワーに元気をもらう

石山商店街と言えば、なんと言っても夏の夜市がすごい。すでに50年を超える歴史を有するという。土曜日の３日間、商店街のメインストリートを中心に、およそ600mにわたって夜店がならび、大道芸やバンド演奏なども繰り広げられる。どこからこんなに人が集まるのだろうと、不思議に思うほどの人出である。今年は７月18日、25日、８月１日の３日間。１日には大道芸大会が開催される。行かれたことのない方は夜市の賑わいに触れられたらいかがだろうか。

夜市での大道芸

2008年２月には、石山商店街アクションプラン「地域と歩む“暮らしのひろば”石山商店街をめざして」を策定した。高齢化が一層すすみ、人と人のつながりの大切さが見直されるなかで、身近にある商店街の果たす役割がこれから大きくなるのではないかと思われる。モノを売り買いするだけの場ではなく、地域コミュニティの中心としての役割を果たすことが、商店街に求められる。まさに「暮らしのひろば」として、人と人の出会いとふれあいを演出し、楽しく安心できる暮らしを支えていくことが期待されているように思う。

年４回開催されるとれ取れ祭

石山商店街では、地域コミュニティの拠点としての役割を高めるために、空き店舗を活用して「石山らんらんサロン」を開設し、出会いと交流の場を提供している。「とれ取れ祭」（年４回）や「らんらん朝市」の開催、地域の子どもを育てる「石山・寺子屋塾」の開設、そして札幌にある石山商店街（全国的に珍しい！同名の商店街）との連携などにも取り組んでいる。

こうした取り組みがじわじわと実を結び、地域を支え地域に支えられる商店街として、楽しく魅力に満ちた場となっていくことを期待したい。

（会 員　森川 稔）

商店街の拠点　石山らんらんサロン

今夏、石山商店街の夜市に是非お出掛けください！

① ７月１８日（土） ② ７月２５日（土）	９つの会場で、JAZZ や軽音楽、大道芸やダンス、癒しの広場など
③ ８月　１日（土）	大道芸大会

← 商店街の今堀副理事長と石山らんらんサロンの中井店長。
石山らんらんサロンにおじゃましました

（株）百町物語がスタート

故芝田清邦会長と百町物語への思い！

大津の中心商店街（丸屋町、菱屋町、長等町）に（株）『百町物語』のお店が幾つかオープンして二か月になります。

私がこの『百町物語』と関わるきっかけになったのは、昨年１０月１日に地域活性化仲間と一緒に寿長生の郷で故柴田清邦会長にお会いしたことでした。

芝田会長の話を聞いて、確かに大津のまち（百町）が再生し人の往来が増えればいろんな事が動くかもしれないが、会長の言葉が最初から気に入った訳でも、考え方に直ぐ共鳴したのではありませんでした。会長は帰り際に「注意しといてや！百町物語とそちらの計画を一緒に考えないでなー」と言われました。

その二日後に会長からお葉書を頂き「これから何かとお力を拝借します。いい町つくりましょう、町衆みんなで！」と相手の立場を考慮した文章に感銘しました。　それからいろんな場所でお会いし、お話していて本当の「考え方」「狙い」「思い」を理解できてきました。

１０月２７日に芝田会長のお母様の葬儀に参列したあと、後日改めて「１１月４日の会議に君も参加してよ！」って要請頂きました。

それから１２月４日の統括会議の席で、居並ぶ役員に「彼は１１月４日から何かと協力してもらってるので、銀閣寺道「N」出身の板前さんのお店の設計を依頼したい！」とお声をかけてもらいました。

「先方の店、見に行ってこいよ！料理も食べ、お店の人、厨房機器のレイアウト、特にオクドさんを見ないと・・」。そして１月１０日現地に行き食事をしながら、厨房の状況・配置も来て見ないと判らないことだらけ、目で計りノートに何度も記入を繰り返しました。

それから二日に一回くらい準備に町なかを歩き、故芝田会長からは「ここ借りたいね、いっぺん聞いといて」そして町なかでいろんな方に出会うたびに「ご無沙汰しています。宜しくお願いします」芝田さんの低姿勢を目の当りにし流石だなあーと思いました。

それから間もないオープン一月ほど前の、３月１８日夕刻突然、芝田会長逝去の訃報を聞き、ショックを受けました。もっと議論したかった。

いま残された仲間と、志された意思は約束事として果たさないといけないと思っております。

有志の役員と協力して進めないと大津子に笑われそう・・・また、いつものジリ貧じゃないかでは、堂々と歩けないです。

【会員　木村　浩】

「百町物語」の店舗は他にもありますが、ここでは店舗紹介ではありませんので、誌面の都合上バランス配置したものです。

「丸屋町商店街写真展」

龍谷大学　大 津 エ ン パ ワ ね っ と
チーム「まりも」 粟井　俊貴

私たちチーム「まりも」は6月12日（土）～14日（日）の3日間、大津百町館にて「丸屋町商店街の写真展」を開催しました。期間中は地元大津市にお住まいの方や商店街でお商売をされている方を中心にご来場いただき、思い出深くご覧いただきました。小さな写真展でしたが私たちはご来場いただいた方々や地域の方々にとって有意義な場になるようにとこれまで取り組んで来ました。

昨年9月からの大津エンパワねっと活動当初は、ほとんどのメンバーが初めて中央地区や商店街に訪れると言う状況ですべてが分からないことばかりでした。その後、月に1度は中央地区に通い、「商店街に愛着を」というテーマを考えました。しかし、この段階では地域の方一人ひとりにお話を伺う機会をつくることができていませんでした。

そして新年度が始まり、「商店街に愛着を」育むために写真展を開こうと決めてからというもの、初めて商店主の方に一軒一軒お願いに伺うことになりました。展示に使用する写真はないか、商店街での思い出を聞かせて欲しいと毎週のように丸屋町商店街で活動し、その他に地域活動に充てられた時間以外にもメンバーで分担しお話を伺うために地域に通いました。この頃から少しずつ地域の方にも顔を覚えていただき、様々な方の商店街に対する思いを伺うことができました。1枚でも集まるかと心配していた写真も多くの方にご協力いただき、一商店街の写真展としては充実した展示物を集めることができました。

【 写真展会場でチームメンバー 】

活動を始めた頃はこれほど深く地域に関わるとは想像していませんでした。そして、この活動を通し私たち学生メンバーは着実に商店街への愛着を育む事ができました。この写真展を開いた目的として普段商店街を利用されない方に対して足を運んでいただくきっかけづくりを考えていました。それは子育て世代の方を対象としていましたが、今回は私たちの力不足でその方々に見ていただくことがあまりできませんでした。若い世代が地域に関わることは欠かせないと思います。活動は9月で終わりますがこの課題についてはこれからも考えていきたいと思います。

最後になりましたが、私たちの活動に対して多くの方に多大なご協力をいただきました。この場をお借りしてお礼申し上げます。ありがとうございました。

大津の町家を考える会が主催する、今年の『萬塾』は例年より遅い開催で６月１４日（日）午後２：００より、大津百町館で開催となりました。

美味しそうな琵琶湖の恵み

第一回は「琵琶湖の恵み、その味覚と魅力」と題して滋賀県文化財保護協会の普及専門委員である大沼芳幸さんを講師にお招きしました。

古代から琵琶湖周辺の人々の生活を支えてきた琵琶湖の魚類についてパワーポイントによる映像を交えての講話、特に数年前から安土城考古博物館を中心に提唱されている「琵琶湖八珍」についての話を中心にして頂きました

次から次へと映しだされる湖魚の美味しそうな料理を見ると、思わず「近江の地酒と一緒にたべたい！」との気分になりました。最後に世界にもまれな淡水魚の宝庫である琵琶湖「ここで美味しい魚が泳ぐ水は、我々滋賀県民、近畿圏の多くの人達が飲んでいる水でもあるという、あたりまえの事実があるのです。魚が気持ちよく泳ぐ琵琶湖の水を同じ生き物として飲みたい。そのような琵琶湖と人の関係を造る事がたいせつだ・・」とのお話でした。

次回『萬塾』「旧逢坂山トンネル探訪」は７月２４日（金）午後１：３０です。

編集後記　　今夏季号はトップに追分から大谷の途中にある「月心寺」の橋本さんに原稿をお願いしました。また、会員の福村氏による「大津の町家を考える会」にふさわしい投稿、関蝉丸芸能祭の報告や地域で活躍した、龍大エンパワ生からの原稿もあって充実した号となりました。「K.A」